

万葉集卷一・二の成立について

〔都大論究〕四七号
二〇一〇年六月

板垣俊一

はじめに

現万葉集二十巻が一度に編纂されたものではなく、編纂年次・形態を異にする巻々が寄せ集められたものだと考えて、これを大胆に組み替えたのは周知のとおり賀茂真淵の『萬葉考』であった。真淵は、巻一・二をもっとも古い巻とし、次に巻十三・十一・十二・十四をそれに続く古い巻、そのほかについては、巻五が山上憶良の、巻七・十が某氏の、巻十五が遣新羅使の、その他が大伴家持の私撰・私家集であり、「古へ万葉集といへるは右にいふ六つの巻」(萬葉考別記)だと想定した。そしてそれに従って巻次を大幅に改編している。その後、今日に至るまで現万葉集の成立過程についてはより詳細な考察が続けられてきた。真淵の説はあまりにも大雑把で今日受け入れ難くなっているが、「此集の中に古き撰みと見ゆるは、一の巻・二の巻也」(同別記)という見方は今日でも定説となっている。しかし、もっとも古い巻と考えられているその巻一・二でさえ、そこにはさらに成立過程の層次が現われているのである。

巻一・二に関するこれまでの成立論では、その層次を腑分けして『原万葉集』を探る書誌学的な研究が行なわれてきた。現在の万葉集に残るその原撰歌が当初集められ編まれていたと推定される歌集

を「原万葉」(後藤利雄)と呼ぶ人もあれば、また「原万葉集」(松田好夫)と呼ぶ人もいるし、あるいは「持統万葉」(伊藤博)と呼ぶ人もいて、それぞれの論者が原初の歌集に載っていた万葉集の諸歌の範囲をそれぞれに推定している。では、そのようにして抽出された原本に万葉集の本質的な部分があるのか――。近年この類の論者が少ないのも、成立論に本質的な問題があると考える人があまりいないからであろう。筆者も、増補・追補の歌を取り除けば最初の原本に至り、そこに万葉歌の本質があると考えているわけではない。しかし鑑賞者として歌を読みながら、ときに異伝の歌があったり、作歌事情の異説が注記されたり、あるいは配置に意味がありそうな歌があったりと、編纂意図に関するさまざまな疑問に直面することがある。そのため、幾層にも積み重なっている成立段階を、ほぐせるだけはほぐしてみる必要があると感じていた。ここに拙稿をものするゆえんである。

一、万葉集巻一・二の原撰歌

周知のように現在みる万葉集は編纂方針の一つとして雑歌・相聞・挽歌の三部立をとっているが、巻を開く誰しもが疑問に感じる

のは、歌が「雑歌」から始まっているということであろう。常識的に考えれば相聞・挽歌に分類した残りを雑歌としてそれらの次に配置するのが自然に思える。このような不自然な構成となっている理由は巻一・二の編纂事情からきていると考えられ、巻三以下の分類がまず雑歌から始められているのも、雑歌を先に立ててすでに出来上がっていた巻一・二の方針にならったものと考えられる。

この雑歌は、名称は「雑歌」であるが、収録されている歌は公的な立場の作者や朝廷の行事に関わる作であり、その点からいえば最初に配置されるのが自然な分類になっている。このことは、巻一・二が二巻合わせて三部立に編集される以前から、なんらかの編纂物としてあったこと、その編纂物は今見るところの三部立とは別の方針で歌が集められていたことを表わしている。もう少し具体的に言えば次のようになるだろう。三部立でひとまとまりになっている今日の巻一・二は、合わせて一つの構造体になっている。そして雑歌・相聞・挽歌それぞれの部は、他の巻には見られない共通する分類基準によって歌が配列されている。つまり「泊瀬朝倉宮御宇天皇代」、また「難波高津宮御宇天皇代」といったように、即位した宮都をもつて識別される各天皇代順に古い歌から並べるという基準が、三つの部立それぞれに適用されている。このことは、すでにそのような基準にそって歌が集められていた古い編纂物を、あとであらたに三部立に組み替えて編纂し直した段階があったことを示すものであり、これが万葉集巻一・二の古撰と新撰の区別を考える大きな根拠になっている。

新撰の段階では、歌が単に集中での位置をかえただけでなく、別の歌集から関連歌が追補されたり、新しい年代の歌の増補が行なわ

れたと考えられる。そのため、これまでの編纂論ではそうした追補・増補された歌を取り除けば、最初に編纂された歌（原撰歌）が残るはずだと考え、それらが集められ編纂された歌集を「原万葉」と呼んできたのである²⁾。

巻一でまず注目されたのは、54番以降の右注が53番までの例と違っていて、「大宝元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊国時歌」というふうに作歌年次を記す点であった（本論末尾「参考表」参照）。これを新しい記載形式と考えて、それ以降は増補された歌と見ることは今日ほぼ定説になっている。これを増補部という。

原撰万葉の成立時期については諸説あるが、後藤利雄の「巻一と、巻二の一部とは、もと一まとまりになっており、これが万葉集の源にもなるものであろう、そしてそれは、原初的には、天皇代には、わかれていても、中西進氏等もいわれているように（『万葉集の比較文学的研究』第八章「万葉集の編纂」）雑歌、相聞、挽歌というふうには、別れていなかったものと見られる」と説く意見や、「持統朝初期までの歌が、巻一巻二ひつくるめて一巻の卷子であった³⁾」という神田秀夫のことばをヒントに、松田好夫（『原万葉集』と柿本人麻呂⁴⁾）では、現在の巻一・二から「或本歌」その他の補入と考えられる歌をすべて除き、部立を取り払い、天皇代順に歌を並べて計八四首からなる「原万葉集」の復元を試みている。そしてその末尾199、201が、柿本人麻呂が詠んだ高市皇子殯宮挽歌で終わることから、高市皇子の没後一、二年（697、698）の間、すなわち文武朝初期に編纂されたと考えた。

一方、巻一・二が一体となった原撰万葉を想定せず、各巻が別々の成立だと考えた伊藤博は、巻一増補部の歌が「すべて元明朝を現

在時点」としていることから見て、その頃を現在時点として認識できる時代は、元正朝末期（養老五年・721）あたりまでであろうから、増補部のもつとも新しい歌の年次である和銅五年の翌年、和銅六年（723）から養老五年（721）にかけての時代に、増補された部分を含む巻一ができ、また同じころ巻二の原形も出来たであろう、とした。

今日では、巻一の一部と巻二の一部が一体となった形を原撰と考える説が有力である。右の松田好夫の試みをうけて、その後橋本達雄も巻一・二を統一体とする視点から、詳細に原撰歌を選び出す作業を行なっている。本論でもこの結果を踏み台にしたいと思うので、ここで少し具体的に、同氏が追補歌・増補歌であるとして原撰歌から除いた歌を、理由とともに分類整理して次に掲げてみたい。それらはほぼ次のようになる。

(a) 「或本」や「一書」による追補

26・148・160・161・162・170・202

* 162は古歌集中に出。202は「或書」による高市皇子殯宮挽歌の

異伝で、あるいは増補。

(a) 「或本」他による増補後の追補

56・79・80・89・90・134・138・139・213・216・227・233・234

(b) 右注表記の違いから判断される増補

50・52・53・54・84・146・228・232

* 50・52・53の藤原宮の歌は、それ以前の右注表記「一時」作歌」と著しく異なる。また、54以降は、作歌年月を記すことから巻末84まで増補である。

(b) その他の右注表記の疑問による追補あるいは増補

32・33・194・195

* 32・33の「高市古人感傷近江旧堵作歌」「或書云高市連黒人」は、原撰万葉の編者が高市黒人を「古人」と誤ることは無いから、直前の柿本人麻呂の近江荒都歌との関連で追補されたと判断される。194・195の柿本人麻呂の挽歌は、右注が異例の書き方である。

(c) もとの同一資料から分散収録されたと考えられる増補

51・114・116・117・118・119・125・130

* 51は「志貴皇子御作歌」であるが、志貴皇子の歌は他に巻一・三・四・八にもある。114・116の穂積皇子への但馬皇女の恋歌三首は、物語性が豊かで二人の関係歌が同巻の挽歌や巻八にも出る。117・118の舍人皇子と舍人娘子の贈答歌も、舍人娘子の歌がほかでは巻一増補部と巻八にしかなく、これも同資料の分散と見られる。

(d) 作歌年次の乱れから判断される追補あるいは増補

196・198・203・206

* 196・198の柿本人麻呂の明日香皇女挽歌は次の高市皇子挽歌と時代が前後していることなどから、これらも追補あるいは増補。203の穂積皇子の但馬皇女挽歌は、204・206の置始東人の弓削皇子挽歌と時代の前後がある。但馬皇女の死は和銅元年（708）と新しく、また置始東人の歌は巻一の増補部66番にあることなどから増補。

(e) 編集理念からの増補

85・88・131・140・207・212

* 85・88の巻頭磐姫皇后関係歌六首は、原万葉を二巻に分ける

とき巻一冒頭の雄略歌と比肩しうる女性の相聞歌としての増補。131、140の柿本人麻呂の石見相聞歌は私的な歌。207以降も柿本人麻呂の私的な歌を含んでいて、原万葉では公的な歌が中心だったと考えられることから増補⁽³⁾。

(f) 大伴氏関係者による増補後の追補

101・102・126・129

以上、おもな理由ごとに分類して整理してみたが、これらのうち、まず(a)および(a')は議論の余地のない追補歌と考えることができる。そのほかで問題となるのは、(b)の藤原宮遷都関係歌の位置づけ、(c)ある同一資料における歌の在り方、(e)編集理念と収録歌、(f)大伴氏関係歌と増補時期、などであろう。これら個々の問題については、ここで細かく立ち入る余裕も必要もありあえない。以下主要な点のみとりあげて検討してみたいが、そのまえに橋本説をもう少し確認しておきたい。

全般的にみると、除かれた上記の歌は、(イ) 原撰部における追補、(ロ) 原撰部に続く増補、(ハ) 増補部におけるさらなる追補に分けることができる。このうち(ロ) 増補部は、橋本説によれば、全一卷からなる「原万葉」を継いで新しい巻を編む目的で、笠金村・山部赤人らが長屋王の主導のもとに精力的に集めた人麻呂時代の、「原万葉」に採り残された歌(拾遺歌群)、および金村の歌をもつて充て、また相聞・挽歌の部立にふさわしい歌を「原万葉」から切り出して(その切り出された歌は巻一の右注に「……歌何首」と記されて、歌数を記さない巻一の右注との違いを示しているという)、二巻三部立に仕立てたもので、その作業は笠金村・山部赤人

らが行なったと推測できるという。また、この推測は、巻二に続く巻三・四・六・八に巻一・二の増補部と時代の重なる古い歌が多く載せられていて、それらは巻一の増補部に採った拾遺歌群の残りを、さらに巻三・四に収録したと考えられることから裏付けられるのだとする。

以上が橋本氏の説くところの追補・増補論である。

二、左注の「今」と「旧本」

現万葉集の左注には、幾つかの「今」という編集時を思わせる文字が出てくる。ほかに編纂年月を示す箇所は無い。その「今」とは一体いつなのであろうか。

たとえば、「原万葉」を継いで新しい歌集の編纂を主導したのは高市皇子の子で持統朝以後宮廷の重鎮だった長屋王だと推測する橋本氏は、二巻三部立のほぼ現在の万葉集巻一・二の形になったのは、長屋王が左大臣となつて政権を支配した神亀年中(724~728)のことであろうとする。この説によれば「今」とは神亀年中のある時点ということになるだろうが、はたしてそうだろうか。巻一からとりあえず二例をあげてみる。

(1) 右一首歌、今案不_レ似_二反歌也。但、旧本以_二此歌_一載_二於反歌_一。故今猶載_二此次_一。亦紀曰…… (15)

(2) 右一首歌、今案不_レ似_二和歌_一。但、旧本載_二于此_一。故以猶載_二焉_一。 (19)

それぞれ歌の内容に関する疑義の注に「今案」と出てくる。二例

とも、編者として不審を表明しつつ、続く文面では「旧本」を尊重してそのままにしておくこととわる。これが原本に大きく手を加えて「今」あらたに追補・増補しようとしている編者の注であるとすれば、そのときの編者は改編以前の原本を「旧本」と呼んでいるわけである。この「旧本」こそ全一卷本の「原万葉集」であると考えて、その復元を試みたのは前述のように松田好夫であつたし、橋本達雄の「原万葉」論もそれに連なる研究である。伊藤博も「巻一・二は、「今」というある時期に、「旧本」を底本としながら、日本書紀・古事記・類聚歌林・或本をもつて校合や考証が加えられ」たと考える点では同じであるが、「旧本」を、増補部を除いてかなり切り詰めてとらえる松田・橋本説と異なるのは、「今」なる編纂時における「旧本」(底本)の姿は、ほぼ「或本」の歌を除外する形態であつたと判断してよい¹¹⁾とした点である。このとらえ方の相違については、もう一度考えてみる価値がある。それによつて「今」がどの編纂成立過程の時点を示し、その「今」の時点で行なわれた作業がどのようなものであつたかを知ることができるからである。

「今案」と記す左注は上記の二例だけでなく、さらに集中十七例ある。(ただし、十六巻の一例と十三巻の二例のほかは巻一から巻六に偏っている。)そのうちから、巻一・二の例を追加すると、

(3) 右二首、今案不似御井所作。若疑當時誦之古歌歟。(83)

(4) 右一首歌、古事記与類聚歌林所説不同歌主亦異焉。因、

檢日本紀曰……今案二代二時不見此歌也。(90)

(5) 右一首、今案不似移葬之歌。盖疑從伊勢神宮還京之

時路上見花感傷哀咽作此歌乎。

の三例となる。

これらについて、後藤利雄著『万葉集成立論』(一九六七)では、現万葉集の左注に現われる「今案」十七箇所を分析して、ほぼ巻の順次に従つて「右一首歌今案……」とか「右今案……」とか「今案……」と書き分けられていること、それに比較的古い時代を示す「今」と、比較的新しい「今」とがあること等を指摘して、右の(1)から(5)については、ほぼ表記が揃つていて編纂時に同一編者が付けたものと考えられというが、子細に見てゆくとそうとも言えない。

右のうち(3)は橋本説によれば巻一の増補部、(4)は巻二の追補部、(5)は巻二の原撰部に出てくる左注である。ちなみに「或本歌」もまた原撰部・増補部いずれにも同じ形式で挿入されている。このように「今案……」の左注および「或本」が原形・追補部の双方にわたつて出ていることから、伊藤博は、「今」なる編纂時においては、原形の部分ばかりでなく追補の部分もすでに一体となつて成書化されており、おおむね「或本」を除く部分が「今」の編者の手許に「旧本」(底本)として伝えられたのである¹²⁾と考えたのである。右にいう伊藤博の「追補の部分」とは橋本説の増補部にあたる。

歌との関係を示せば、右の(3)は巻一の末尾近く「和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮時山辺御井作歌」三首のうちの二首、

82 うらさぶる情さまねしひさかたの天のしぐれの流らふ見れば

83 海の底沖つ白波立田山いつか越えなむ妹があたり見む

に付けられた左注である。この二首は雑歌にふさわしい旅の歌ではあつても確かに「御井」の歌ではない。しかし、この部分を増補した編者本人が、同時にこのような注は付けないだろう。他資料から

の収録であれば「或本歌」などとしてもよさそうであるが、それも無い。

(4) を保留して、次に(5)はどうか。大津皇子に対する大伯皇女の挽歌である。これは並んで二組あって、

①大津皇子薨之後大来皇女從伊勢斎宮上京之時御作歌二首

(163・164)

②移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首

(165・166)

とある②の二首目の歌、

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はな
くに

(166)

に付けられた左注である。これは伊勢の斎宮から上京する時の歌にふさわしいから、単純に前の①に移せば済むことのように思われるが、編者はそのままにして疑問の左注(5)を付けた。

大津・大伯関連歌については、橋本説が説く原撰部にあたり、右の挽歌の前に次の相聞歌が別れて載る。

③大津皇子竊下於伊勢神宮上来時大伯皇女御作歌二首(165・166)

大伯皇女の歌を原撰歌と考えれば、これは配置替えということになる。しかし、原撰歌集に並んでいたであろう大津皇子関連の歌を、相聞部と挽歌部に別けたとき、明らかに伊勢から上京する時の歌と分かる166を、あえてそのまま二上山移葬の歌として編者が並べたであろうか。この例は原本を尊重するとした(1)や(2)の例とは違っているように思う。なぜなら、(1)(2)の場合も不合理な並びではあるが、右注に作歌事情を記してどこかに新たに配列する手段を持たない歌であることから、やむなくそのままにしたと考

えられるからである。あるいは、この歌群が原撰歌でなく、前節の分類(c)にあたる他の同一資料からの分散収録歌であったと考えてみることもできるだろう。¹³⁾しかしそう考えても、同一資料を分散して収録するほどの操作を行なった編者が、166の歌の並びを原資料のままに変えないでこのような注を付けたとは考えにくい。

保留した(4)についても対象となっている歌は巻二の巻頭歌、

85 君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

(この歌にも「右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉」の左注あり。)

という磐姫皇后の歌に対する、万葉集中では異例の異本歌引用形式であるが、古事記の衣通王の歌と伝える、

90 君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ

を異伝として載せたその左注であり、またこの場合の左注の長さも異例なほど長くなっている。疑問が残る部分である。巻頭に掲載する歌は重いはずで、その重要歌として85を巻頭に配した同じ編者が、その次にわざわざそれを疑問とするような記載をするだろうか。

このように考えると、巻一・二における「今案」の「今」は、必ずしも原撰歌集を二巻三部立に編纂し直した時点のみを指すものではなく、二巻三部立となった後の時点でもあったと考えられる。

三、原本尊重と増補・追補歌

ある「今」なる時点で、巻一・巻二の新たな編纂を行なったと思われる編者は、拠るべき「旧本」を尊重してそこに多少の矛盾があっても私意による大きな改編はしなかった。¹⁴⁾そう考えると、原撰歌集の歌は一首も削られることなく現万葉集巻一・巻二に継承され

たことになる。それが松田・橋本説の原撰歌集復元の根拠にもなっている。さらに「旧本」を分類・増補して二巻三部立の新たな本となった歌集を手にしたその後の編者が、さらなる増補・追補など何らかの改編を加えた「今」なる時点においても同様の態度が継承されたと考えられる。このことは右の「今案」にも表われているし、またほとんど同じ歌と判断される異伝歌があった場合でも、天武天皇の25番歌および人麻呂の石見相聞歌131・132番歌の二例に見られるように、25、131・132を残したまま、それぞれに26番、138・139番の「或本歌」を追加し、次のような左注を付けていることで知れる。

イ 右、句々相換。因此重載焉。(巻一・26)

ロ 右、歌舛雖同、句々相替。因此重載。(巻二・138・139)

また、同一編者による「或本」追補時のことであると思われるこれらの左注でも、イは原撰歌に入れられているが、ロは人麻呂の私的な歌として増補部に入れられている。原本尊重のこの左注が付けられたとき、この時点での編者が手にした本にはすでに増補部とされる部分が含まれていたことを示しているだろう。

ところで増補部には、第一節で述べた(b)の部分にあたる右注に作歌年月を記す「大宝」以降の年号が入る歌、

大宝元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊国時歌 (54・55)

も含まれる。橋本説ではここに編纂上の大きな区切り目があると考えているのだが、これは必ずしも雑歌・相聞・挽歌のすべてに当てはまるものではない。確かに、大宝以前、朱鳥の年号もあった。しかし今日見る日本書紀では制定した天武天皇晩年の朱鳥元年のみで持統朝には使用されていないし、年号の使用が大宝律令から正式に始まることを考えれば、新しい歌に年月を入れるのは当然のことだ

からである。以下に述べるように増補も段階的になされたとみれば、大宝以後の歌に年月が入るのは自然である。

さて、原撰歌集が増補改編されて二巻三部立になったその後のある段階では、巻一・雑歌の始めから、「藤原宮御宇天皇代」末尾、和銅五年の右注を持つ歌群のうち83番まで、また巻二・挽歌の末尾、霊龜元年の232番までのうち、伊藤説のように「或本」の補入歌を除いた部分を収録する歌集があったと考えられる。なぜなら、その「或本歌」とは、すでに存在していた二巻三部立歌集を前提に、そこに追補された歌であり、その追補時点では追補の対象となる本は増補部も含めて一通り完成した本でなければならぬからである。「或本」の補入歌は、巻一・二にまんべんなくある。しかも巻二の末尾さへ「或本歌」で閉じられているのである。そこで、その本がまとめられた時代はいつかとなれば、これは単純に知れることで、巻中のもつとも新しい歌で判断できる。

四、歌集成立と増補の時代

巻一のもつとも新しい年号をもつ歌は、81・83番の「和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢斎宮時山辺御井作歌」であり、巻二では230・232番の「霊龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌」である。すなわち二巻三部立の本は、霊龜元年(715)の翌年以降に増補の部分も含めてまとめられた。

しかし、問題が残る。これらの新しい歌は、巻一・雑歌の末尾と巻二・挽歌の末尾にあたるが、相聞は巻二の中ごろで終わっているため相聞の末尾には七一〇年代の歌が無い。全体がまとめられた時

代を考えれば、和銅五年(712)から靈龜元年ごろの相聞歌もあるはずだが、相聞の中でおそらくもつとも新しいであろうと思われる歌は、大宝元年(701)を下らない。相聞歌が雑歌や挽歌のように年月を記す性格の歌でないことは理解できるし、当然年号を記す歌はない。そこで推測になるが、相聞の比較的末尾にあつて歌の下限が知れる例を見た場合、

116 但馬皇女在高市皇子宮時、竊接穗積皇子事既形而御作歌一首は、高市皇子が持統十年(696)に没していること、また、

130 長皇子与皇弟二御歌一首

は、長皇子の皇弟である弓削皇子が文武三年(699)に没していることなどから、おおざっぱに大宝元年以前の歌しか収録されていないということができらう。

この年代の開きをどう考えるかであるが、これは二巻三部立の本が一度まとめられたのが文武朝初期、持統女帝の讓位(697)後すぐだったことを表わしているだろう。万葉集の巻一、巻二がもと巻子本だったことは認められている。巻子本は、末尾の紙に余白を残して、あるいは紙を継ぎ足して内容を増補することが考えられるが、巻の途中を切つて間に新しく紙を挟むことはあまり行なわれなかったのではないだろうか。そうだとすれば、相聞末尾の歌の時点以降の巻一、巻二の歌は、巻子本の巻一、巻二末尾に継ぎ足されて増補された歌だと考えるのが自然であろう。すなわち、巻一の54番以降(後述のように実際は52番以降)、巻二の203番以降(後述のように実際は202番以降)がそれにあたる。

このように考えると、いわゆる全一卷本の原撰歌集はさらにそれ以前に編まれたものとなる。歌を区切る標題が各宮都に即位した天

皇代順になつていて、その最後が「藤原宮御宇天皇代」である。持統の在位期間と藤原宮が営まれた期間とは一致しない。しかし歌数でみれば持統朝が断然多く、人麻呂の長歌を含めて内容も充実している。当然、歌集が成り立つためには「藤原宮御宇天皇代」が欠かせない。その標題にふさわしい藤原宮遷都は持統八年(694)に行なわれた。各宮都の天皇代の区切りを設けて編纂された全一卷本の原撰歌集は遷都後の持統朝に成立したと推定できるだろう。

ここで、現在の巻一における原撰歌集の歌はどこまでかという問題にふれておきたい。これは前述の橋本説(b)の部分と関わる問題で、今までの議論では、50の「藤原宮之役民作歌」、また52・53の「藤原宮御井歌」という簡略な右注表記がそれ以前と異なるという点、また50と52の簡略な右注表記の間に、51の「從明日香宮遷居藤原宮之後志貴皇子御作歌」という右注表記を挟む違和感から、このあたりに断層があると考えられてきたが、その断層を具体的に49と50に置か、53と54に置くかで意見が分かれていた。しかし、ここでは新しく51と52にあるのだという意見を出しておきたい。すなわち52の「藤原宮御井歌」から新たな表記が始まっているとらえるからである。50の「藤原宮之役民作歌」の左注には、次のようにある。

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月辛酉藤原宮地、八年甲午春正月辛酉藤原宮、冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮。

右注には年号が入っていないが、もし入れるとすれば「朱鳥七年癸巳秋八月」等の年月が入るだろう。しかし前述のように「朱鳥」の年号は一般化していなかったため、万葉集の右注では使われていない。万葉集が「朱鳥七年」の左注を付けた時点も、年号の使用が

一般化してからであろう。その次の「藤原宮御井歌」長短歌二首も年号は使われていないが、さらに次の54では、

大宝元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊国時歌

との記載があつて、歌のあとの左注に、

右一首坂門人足

と作者名が記載されている。これは、右注に作者名を記さず左注に「右歌作者未詳」とする52の形式と同じなのである。その前の歌は個人名ではないにしても「役民作歌」と作者名を右注に記すそれ以前の原則が貫かれている。このように考えると巻一の増補部は藤原宮の「御井歌」から始まることになるが、しかもここで巻一の末尾に目を転じると、「藤原宮御宇天皇代」が同様に「御井歌」の歌で閉じられていることを知る。すなわち、次の歌である。

和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮時山辺御井作歌

(81~83)

和銅五年は平城遷都後の元明朝ではあるが、あえて「藤原宮御宇天皇代」に入れられているのは意図的であろう。その理由は「御井歌」に始まって「御井歌」で閉じるという構成上のまとまりのためと考えられる。このことは増補部も単なる歌の書き足しでなく意図をもつて編纂されたということを表わしているだろう。¹⁵

五、或本とその伝来

ところで、靈龜元年(715)の翌年以降にまとめられていた二巻三部立本原形増補本(現万葉集巻一・巻二から左注・二行細注および或本歌を除いた本)に左注を施し、「或本」から異伝歌を追補した

時代はいつか。まず、その左注や二行細注に引用される文献名をあげてみよう。

一書 或本 或書 古本 古歌集 類聚歌林 柿本人麻呂歌集
笠朝臣金村歌集 古事記 日本書紀

このうち古事記の成立は和銅五年(712)で、日本書紀の成立は養老四年(720)である。山上憶良の『類聚歌林』は成立年不明だが、文中に日本書紀を引用していることからすれば、養老四年よりも後の成立になる。一般的には憶良が東宮に侍していたころ(721~724)といわれている。そうすると、二巻三部立本原形増補本の左注は早くとも養老五年(721)を遡ることはない。逆にそれから十年二十年時代が下るとも考えられる。古事記の歌や「或本歌」の追補も左注と同時期に行なわれたのではないだろうか。

そのとき使った「或本」とはどんな本か。これについては、紛らわしい文献として、次のような追補歌の右注「一書」が二例ある。

一書曰近江天皇聖躬不予御病急時太后奉獻御歌一首 (148)

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首 (160)

これらは「或本」と引用の仕方が異なっている。「或本」の場合、多くが右注に「或本歌」とのみある。¹⁶しかし右の「一書」の場合、作歌事情・作者を原本によらずあらためて右注に記載していることからすると、原本とはまったく別の本であると考えられる。148番の例を具体的に次に示してみよう。歌は天智挽歌である。

天皇聖躬不予之時太后奉御歌一首

147 天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり

一書曰近江天皇聖躬不予御病急時太后奉獻御歌一首

148 青旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも

「或本」と「一書」という呼称の違いは文献の種類の違いである。つまり「或本」とは、それを補入しようとしている原本すなわち二巻三部立原本本と同様の形態を持ち、またほとんど共通する歌を収録するもう一本であるが、「一書」はまったく別の歌集だということである。言い換えれば「或本」は二巻三部立原本本の写本の一つだった。

では、その写本（或本）に異伝歌が存在するとはどういうことか。人麻呂の死を悼む妻の立場の歌に「或本歌」を載せているが、その左注には次のようにある。

或本歌曰

227 天離る夷の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし
右一首歌、作者未詳。但、古本以此歌載於此次也。

ここで「或本」を「古本」と呼んでいることに注意したい。また、「以此歌載於此次也」という注記は、その「或本」でも人麻呂の死をめぐる歌群の並びが、今追補しようとしている手元の一本とほぼ同じであることを示唆している。要するにこれは同一の本の写本だと見てよく、さらにそれを「古本」と呼ぶことは、追補時点から見て伝来の古いものだったことを示しているだろう。

しかも、写本の中には歌集の構成上から歌の配列を考えて新しい歌を追補するものもあった。巻一末尾近くの作者未詳歌「或本、從藤原京遷于寧楽宮時歌」とする長・反歌二首（79・80）もそうである。それに続く和銅五年の長田王の「山辺御井」の歌についての議論は既述したが、この平城遷都歌もまた、巻一増補部前後の歌と構成上の密接な関連をもつて補入されたと考えられる。つまり歌の内容が「藤原宮之役民作歌」（50）と次の点で類似するからであ

る。まず第一に、前者は朝廷に対する無名の役民の奉仕を歌い、その点で後者もまた朝廷に対する無名の官人の奉仕を歌う点。また第二に、前者は宇治川から泉川へと宮都建造の木材を運ぶ様子を歌い、後者は初瀬川から佐保川へと川舟で奈良へ通う官人の様子を歌う点。状況は違うけれども、川を詠み込んで朝廷に仕える苦勞を歌う点では共通している。これは、巻一の原因部末尾、「藤原宮之役民作歌」を意識した追補というしかない。ちなみに、この「或本」の「從藤原京遷于寧楽宮時歌」（79・80）は、直前にある寧楽宮への遷都歌「和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧楽宮時御興停長屋原迺望古郷作歌」（78）に対する異伝となつてゐるが、この異伝歌はまた巻一の断層と見られてゐる51の藤原遷都歌「從明日香宮遷居藤原宮之後志貴皇子御作歌」と対応して置かれてゐることは明らかである。以上から、「或本」の中には巻一原撰部末尾の「藤原宮之役民作歌」を意識して、79・80の歌で「藤原宮御宇天皇代」を閉じようとした本もあったということである。

二巻三部立原形増補本が成立したのが、仮にもっとも早くて靈龜元年（715）だったとしよう。その写本の一つが「古本」と呼ばれるのはいつがふさわしいか。少なくとも数年後ではないだろう。「或本」等の歌を追補して左注を加え、現在の万葉集巻一・二の形にした時代は、厳密には七二〇年代以降としか言いようがないが、ある程度時代が下らなければ「古本」の呼称はあり得ない。

公的な儀礼歌を含む万葉集が為政者の関心のもとに扱われたことは充分考えられるから、文武天皇の吉野行幸時の從駕歌（巻一・75）を始め数首の万葉歌を残してもいる長屋王は、そうした為政者にもっともふさわしい人物であろう。前述のように橋本達雄は、「原

万葉」が二巻三部立に編纂しなおされたのは、長屋王が権力の頂点左大臣となり謀反の疑いで自死に追いやられたまでの期間、すなわち神龜年中（724～728）のことで、笠金村・山部赤人らを主導してこれを行なったという説を呈示している。しかし右に述べてきたことから考えれば、それ以前に成立していた二巻三部立の万葉集を、他の資料によって校合し、同種の古写本によって追補するという作業をさせたのがそのときだったという考えも成り立つのではないだろうか。⁽¹⁸⁾山上憶良の「類聚歌林」が、集めた諸歌を何らかの形で類聚した書であることから、部立によって歌を編集するという考えは、すでに神龜年中よりもっと前からあったと思われるのである。

あるいは二巻三部立原形増補本に校合と追補を施したのは、神龜年中よりもっと時代が下るかも知れない。巻二の末尾、靈龜元年に死んだ志貴皇子の挽歌（230～232）は、「右歌笠朝臣金村歌集出」と左注にあつて、笠金村の歌集から採られた可能性がある。すると、後藤利雄著『万葉集成立論』がいうように、巻八の春相聞に「天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈三唐使歌一首并短歌」とあつて、少なくとも天平五年までは生存していた彼の歌を集中に入れているということは、彼が歌集を残して以降の引用だから、巻二の現在形が成るのは天平五年（733）閏三月以後であろうともいえる。⁽¹⁹⁾

それはともあれ、二巻三部立原形本は世に数種の写本（或本）が同時に存在していたと考えられ、筆写の段階で「或本歌」の異伝が生じていった。今日残されたものになる本を所持していた者が、他の写本と校合してそれらの異伝（と言っても一覽表から分かるように十一例ほどしかない）を書き入れた。その本が、たまたま大伴家持の手に渡つて、今日の万葉集巻一・巻二として残つたのである。

現万葉集巻一・二の原形に相当する二巻三部立本は、大伴氏関係者（あるいは山上憶良）に書写伝来されて巻二の「大伴宿祢娚巨勢郎女時歌」（101）等の増補を受けたり、あるいは笠金村らの手に渡つて増補・追補を施されたりしながら、ついには大伴家持の手に渡つて今日まで伝えられたものと思われる。

まとめ

以上、万葉集巻一・二の成立過程を考えてみた。前提としたのは、古く遡つたある時点で現万葉集巻一・二の半数にあたる歌が収録されていた（A）全一卷の原撰万葉があつた、という説である。その編纂は藤原宮遷都後であろうと思われる。この歌集を母胎として、新たな増補が行なわれた段階で雑歌・相聞・挽歌の三部立による歌の分類がなされた。増補によつて歌数がふくらんだため二巻に別けて、初巻には朝廷の公的な歌を集め、もう一卷には相聞・挽歌に当たる歌を分類して集めた。そのさい初巻を相聞・挽歌以外の歌として雑歌の部と名付けた。歌の配列は、三部立のそれぞれを、各宮都に即位した天皇代順の標題でくくるという原撰万葉歌集が採っていた形式を踏襲した。こうして成立したのが現万葉集巻一・二の原形に相当する（B）二巻三部立原形本である。これは巻二の途中で終わる相聞の末尾の年代である文武朝初期ごろの成立であろうと思われる。その後、「寧楽宮」の表題も立てられて、さらなる増補が行なわれたが、現巻一・二のうちもともあたらしい年号が靈龜元年（715）であることから、そのころ（C）二巻三部立増補本ができていた。この増補本はある程度流布して、いくつかの写本（或

本)が存在した。時代が経過してそれらの写本が古くなつたある時期に、(D)ある特定の一本に他の写本から「或本歌」の異伝を追補したり、さらに他の資料を利用して左注が施された。その時期は未詳であるが、それが残されて今日まで伝わったのが現『万葉集巻一』と巻二である。

近年のもので見落とした論考もあると思うが、これまでの研究をふまえてはほこのような成立過程の見通しが立つのではないかと思う。

注(1) 歌の分類としては『文選』巻二十八に「楽府(下)」「挽歌」

「雑歌」とあり、それを借りたするのが通説。『説文』に

「雑」は「五采相合也」とあり、「色彩のある織物を組み合わせた意」(白川静著『字統』)が原義で、また「広雅」に

よれば「雑とは聚なり」(藤堂明保著『漢字語源辞典』一九六五)の意味もあって、粗雑などの意味だけではない。

(2) 本論では便宜的に「原撰万葉」の用語を使う。

(3) 『万葉集成立論』一九六七年、第四章

(4) 神田秀夫「万葉歌の筆録と万葉集の編纂」(『日本文学研究資料叢書・万葉集Ⅱ』所収、原『言語と文芸』五一四、一九六三年七月)

(5) 『萬葉集研究』四所収、一九七五年

(6) 『万葉集の構造と成立・下(古代和歌史研究2)』一九七四年、初出一九六七年

(7) 橋本達雄著『万葉集の編纂と形成』二〇〇六年、第一章「原万葉の復元」、終章「万葉集の編纂と形成」

(8) 村田正博「歌の配列と構造」(『国文学 解釈と鑑賞』特集・万葉集・読みの現在)一九九七年八月、三一頁)では、川嶋皇子挽歌「柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」(194、195)と明日香皇女挽歌(196、198)の配列順次については、明日香皇女が忍坂部皇子の妻であり、直前の挽歌が忍坂部皇子の妹である泊瀬部皇女の夫・川嶋皇子を悼む歌として二人の兄妹に献げられているところから、忍坂部皇子関係歌としてまとめられたものであること、また

但馬皇女挽歌(203)も類似の事情によるもので、但馬皇女が高市皇子の妻であることから、直前の高市皇子挽歌の次に続けられたもので、いずれの場合でもそれらの歌群の中では各人の死没年次順に配列されている、とする。

(9) 橋本氏は、高市皇子殯宮挽歌(201)で原撰歌集が終わっていたと見ているから、202以降は巻末まで増補歌となる。

(10) 『万葉集の編纂と形成』終章「万葉集の編纂と形成」五九九頁

(11) 『万葉集の構造と成立・下(古代和歌史研究2)』第九章「女帝と歌集」

(12) 同右「万葉集の構造と成立・下」二二頁

(13) 松田好夫「『原万葉集』と柿本人麻呂」(『萬葉集研究』四、一九七五年)では、右の①③の歌群について「同じ資料にあつたのを、やはり第一次増補の折、「相聞」の部と「挽歌」の部にそれぞれ補入されたもので、『原万葉集』にはなかったと推定される」(二〇五頁)とする。皇女の名の表記が「大来」「大伯」と異なっている点はいずれにして

も疑問が残る。

- (14) 卷一・32近江荒都歌の作者が「高市古人」となっている末尾に「或書云高市連黒人」という二行細注が付いている。

「古人」は32の歌「古人尔和礼有哉楽浪乃故京乎見者悲寸」の最初の二字にひかれた誤りと思われるが、編者はこれも直さなかった。

- (15) 断層を53と54の間に考える伊藤博は、卷一第一部(1、53)の最後が「藤原の宮」の「御井」と「娘子」に関する歌であり、末尾の和銅五年山辺御井の歌(81、83)もまた伊勢斎宮参内時の「御井」と「娘子」に関する歌となっているのは、卷一の第二部を継ぎ足した編者たちが、藤原時代をいささかずれることを承知の上で、第一部の末尾に照応させることを狙って載せたものだとする(『萬葉集釈注一』集英社文庫、二〇〇五年)。これに関連した私見は次章に述べる。

- (16) ただし79、80のみ例外で「或本從藤原京遷于寧楽宮時歌」という右注がある。そのほか二行細注(或本以件歌為後皇子尊殯宮之時歌反也—169)か、または左注(右或本日葬河嶋皇子越智野之時献泊瀬部皇女歌也—195)としてあげられる例があるが、それらは作歌事情が異なることの説明であり、右注に相当するような重みを持った記事ではない。

- (17) 162番の異例の右注「天皇崩之後八年九月九日奉為御斎会之夜夢裏習賜御歌一首」も「古歌集中出」となっていて別の歌集。

- (18) 写本を見比べて歌句の違いに「二云」の異伝を注したのも

そのときの作業だったと思われるのは、校合に用いた「或本」にはその注記がないことから知れる。

- (19) 下限は、あまりに広いけれども、伊藤博著『万葉集の構造と成立・下(古代和歌史研究2)』(二二二頁)が述べているように、作歌事情の検証のためには見るべき当然の資料と考えられる続日本紀の第一次撰定が終わった七六四年までの間であったとは言えよう。

*文中に引用した万葉集の注および訓読歌は、ほぼ中西進編著『万葉集 全訳注原文付(二)』(講談社文庫、一九七八年)に拠ったが、一部ひらがなを漢字に書き換えたり旧字体をできるだけ今日常行の字体にあらためるなど多少の改編を施してある。

〔参考表〕 卷一、二の収録歌一覧

○※欄の数字は橋本達雄著『万葉集の編纂と形成』(二〇〇六)第一章「原万葉の復元」の推定による原撰万葉歌の順序である。また、a、fは、拙稿の第一節で分類した橋本説の項目の記号と対応する。

○作歌事情・作者の欄には字数が許す範囲で万葉集の右注を入れたが、そのほかは作者が分かる程度に書き改めたところも多い。

○卷一・二増補部の境界線は私意による。

[illegible]

持統	藤原宮御宇天皇代	28	持統天皇御製歌	56		93 95	b'	32 33	高市古人感傷近江旧堵作歌	96	34	幸于紀伊國時川嶋皇子御作歌	97	35	越勢能山時阿閉皇女御作歌	98 101	36 39	幸于吉野宮時柿本朝臣人麻呂作歌	105 107	40 42	幸于伊勢國時留京柿本人麻呂作歌	108	43	当麻真人麻呂の妻の歌	109	44	石上大臣從駕作歌	110 114	45 49	輕皇子宿于安騎野時人麻呂作歌	b	50	藤原宮之役民作歌	c	51	志貴皇子の藤原宮遷都歌	以下84まで卷一の卷末に増補した歌	b	52 53	藤原宮御井歌	六九五	b	54 55	大宝元年太上天皇幸于紀伊國時歌	七〇一	a'	56	或本歌	七〇二	b	57 58	二年壬寅太上 天皇幸于參河國時歌	59	59	譽謝女王作歌	60	60	長皇子御歌	61	61	舍人娘子從駕作歌
----	----------	----	---------	----	--	----------	----	----------	--------------	----	----	---------------	----	----	--------------	-----------	----------	-----------------	------------	----------	-----------------	-----	----	------------	-----	----	----------	------------	----------	----------------	---	----	----------	---	----	-------------	-------------------	---	----------	--------	-----	---	----------	-----------------	-----	----	----	-----	-----	---	----------	---------------------	----	----	--------	----	----	-------	----	----	----------

a'	a'	e	仁德朝	【相聞】	b	b	a'	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b		
90	89	85 88	難波高津宮御宇天皇代 磐姫皇后思天皇御作歌四首 或本歌	古事記歌謡	84	寧	81 83	79 80	78	77	76	74 75	73	71 72	70	66 69	64 65	63	62
					長皇子與志貴皇子於佐紀宮俱宴歌	樂宮	和銅五年長田王山辺御井歌	或本歌	和銅三年藤原宮望郷歌	御名部皇女奉和御歌	和銅元年戊申 天皇御製歌	大行天皇幸于吉野宮時歌	長皇子の御歌	大行天皇幸于難波宮時歌	太上天皇幸于吉野宮時高市黑人歌	太上天皇幸于難波宮時歌	慶雲三年丙午幸于難波宮時の歌	山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌	三野連入唐時春日藏首老作歌
							七二二				七〇八					七〇六	七〇三 四	七〇二	

c · e	a'	a'	c · e	c	f	f	c	c	c	c	102 104	57 62	持統朝	53 54	天武朝	f	32 36	27 29	25 26	天知朝
140	138 139	（うち134或本反歌）	131 137	130	129	126 128	123 125	119 122	117 118	114 116	111 113	105 110	藤原宮御宇天皇代	103 104	明日香清御原宮御宇天皇代	101 102	96 100	93 95	91 92	近江大津宮御宇天皇代
柿本人麻呂妻依羅娘子の歌一首				長皇子与皇弟御歌一首	石川女郎の大伴宿奈麻呂贈歌一首	石川女郎・大伴田主贈答歌三首	三方沙弥娶園臣生羽之女の歌三首	弓削皇子思紀皇女御歌四首	舍人皇子・舍人娘子贈答歌二首	但馬皇女・穗積皇子關係歌三首	弓削皇子・額田王贈答三首	大津皇子關係歌六首		天武天皇・藤原夫人贈答歌二首		大伴安麿・巨勢郎女贈答歌二首	久米禪師・石川郎女贈答歌五首	内大臣藤原鎌足卿關係歌	天智天皇・鏡王女の御歌	
				六九九以前	六八六以前			六九九以前		六九六以前	六九九以前									

【挽歌】																		
齊明朝																		
後岡本宮御宇天皇代																		
13 16																		
17																		
b・c																		
(うち146 大宝元年の結松の歌)																		
(うち145 山上臣憶良追和歌)																		
天智朝																		
近江大津宮御宇天皇代																		
37 44																		
a																		
(うち148 一書歌)																		
天武朝																		
明日香清御原宮御宇天皇代																		
48 50																		
55																		
159																		
天武天皇崩之時太后御作歌一首																		
160・161																		
一書歌二首																		
天皇崩之後八年御齋会之夜の歌																		
a																		
持統朝																		
藤原 宇天皇代																		
宮御																		
162																		
163 166																		
大津皇子 挽歌群四首																		
167 169																		
柿本人麻呂の日並皇子挽歌三首																		
170																		
或本歌																		
171 193																		
皇子尊宮舍人等慟傷作歌廿三首																		
194 195																		
柿本人麻呂の川嶋皇子挽歌二首																		
196 198																		
柿本人麻呂の明日香皇女挽歌三首																		
199 201																		
柿本人麻呂の高市皇子挽歌三首																		
六八六																		
六八九																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		
六八六																		

a'	b	b	a'	e	e	e	c	c	a'	c·e	d	d	a
233 234	230 232	228 229	227	226	224 225	223	220 222	217 219	213 216	207 212	204 206	203	202
或本歌二首	靈龜元年志貴親王挽歌三首	和銅 四年河辺宮人姫嶋死人歌二首	或本歌曰	丹比真人柿本人麻に擬た返歌一首	妻依羅娘子の人麻呂挽歌二首	柿本人麻呂の石見国臨死歌一首	柿本人麻呂の狭岑 人歌三首	柿本人麻呂の吉備 死女挽歌三首	或本歌四首	柿本人麻呂の泣血哀慟作歌六首	弓削皇子薨時置始東人作歌三首	穗積皇子の但馬皇女挽歌一首	或書反歌一首
	七一五	七一一									六九九	七〇九	

以下232まで巻二の巻に増補した歌

末

(いたがき・しゅんいち 新潟県立大学)